

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520563

研究課題名（和文）後期ローマ帝国時代西方属州の政治的展開に関する多元的解析の試み

研究課題名（英文）Political history of the western provinces in the Later Roman Empire :
A study of the political process

研究代表者

南川 高志 (MINAMIKAWA TAKASHI)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40171099

研究成果の概要（和文）：本研究は、後期ローマ帝国時代の西方属州について、その政治過程を文献史料と考古資料の両方を用いて分析しようと試みたものである。研究動向の把握にまず努め、「古代末期」学派をめぐる学界の状況と問題点を明らかにした。次いで、西方属州について精査し、ローマ風の都市的生活の浸透度如何が4世紀の当該地域の動向に大きく関係していたことを明らかにしたが、5世紀以降の史料に記される反ゲルマン感情を政治史構築に持ち込んではいないことも深く認識された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the political process of the western provinces of Later Roman Empire through the analyzing of literary and archaeological sources. In the first place, the Head Investigator tried to examine the academic trend of researches of the Later Roman Empire and to explain the problems of researches by the *Late Antiquity* School. Secondly, he analyzed the political process of the western provinces and found the relationship between the changes of these provinces in the 4th century and the level of Romanization in the High Empire. He also emphasized that the scholars of Later Roman Empire should not accept the anti-German attitude written in the literary sources of the 5th century as an important fact to construct the historical image of the 4th century Roman Empire.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,100,000 | 0 | 1,100,000 |
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 690,000 | 4,090,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西欧史

1. 研究開始当初の背景

ローマ帝国の衰亡は、世界史上第1級の研究テーマの一つとなってきた。そして、帝国の衰退過程や衰退原因については、18世紀の

モンテスキュー『ローマ人盛衰原因論』やエドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』以来、連綿と研究と叙述がなされてきたのであり、論者の時代を色濃く反映させながらさま

ざまに語られてきたのである。19世紀に近代歴史学が成立し古代史研究が順調に発展した後は、きわめて精緻で冷静な研究に基づく見解も発表され、20世紀の後半に入ると、そうした研究の成果や諸学説が整理されて、学界の共有財産として定着したかに思われた。

しかし、20世紀の第3四半世紀を過ぎて、ローマ帝国の衰亡に関わる分野の研究が急速に進み、学界に大きな変化が生じた。アメリカ合衆国、プリンストン大学教授のピーター・ブラウン博士らが、ローマ帝政時代の後半、後期ローマ帝国時代について、帝国の衰退と古代の終わりという消極的なイメージをともなった歴史像から解き放ち、紀元後2世紀からビザンツ帝国初期時代に至るまでの地中海世界を、独自で積極的な価値を持つ「古代末期」と定義して、その意義を強調し、時代認識を一変させたのである。ブラウン教授らの「古代末期」学派の活躍で、学界ではもはやローマ帝国の「衰亡」は語られなくなり、代わって「ローマ世界の変容」が8世紀のバグダードまで視野に入れながら議論されるようになった。

だが、彼らの研究はローマ世界のうちでもビザンツ帝国へと継受されるローマ帝国東部に重心がおかれ、政治的にはゲルマン民族の移動の嵐の中で解体したローマ帝国の西部については、それほど議論がなされていない。しかも、彼らの研究は主として社会史的宗教史的な視角からなされているため、政治を語るには弱い。

一方、帝国の西部の研究について大きな貢献をしたのは、わが国では佐藤彰一氏に代表される西ヨーロッパの初期中世史の研究者たちである。しかし、彼らの論じた「ポスト・ローマ期」論は、中世史家の作業であるゆえ、ローマ帝政初期の研究からの連続性は希薄で、認識目標の中心にローマ帝国が置かれているわけでもない。

したがって、古代末期のローマ帝国西部の研究、とりわけ政治史的研究は、旧来からの後期ローマ帝国史研究のまま取り残されているとって過言ではない。本研究は、かかる学界の状況をふまえて、欧米学界の現在の主たる潮流とは異なる立場から、独自に後期ローマ帝国史の研究を進めようと考えたものである。

2. 研究の目的

本研究は、いわゆる後期ローマ帝国時代の帝国西部の政治状況を多元的に分析しようとするものである。1で述べたような、近年の学界における「古代末期」研究と西ヨーロッパ初期中世史研究の発展を批判的に摂取し、また帝政前半期に関する研究代表者自身のこれまでの研究成果を踏まえつつ、後期ロ

ーマ帝国時代の帝国西部の政治状況を、独自の視点から検討する。「独自の視点」とは、従来の諸研究のようにローマ市やイタリアを中心とする地中海帝国としてのローマ帝国の動向を基軸とせず、むしろイタリアを離れた辺境の属州に視点を置き、時代を動かす動因の場を考察することである。さらに、帝国をハイブリッドな構造体と捉える観点から、古代終焉期の政治力学を論じる際に「ローマ人」対「ゲルマン人」といった安易な二項対立に陥らずに多元的な解析を試みることも、本研究の独創的な作業である。辺境属州こそ古代から中世への移行期の政治的激動の場であり、また安易な二項対立を取らない解析によって、研究の特殊ヨーロッパ的な性格を克服できると期待される

3. 研究の方法

研究の具体的な方法としては、以下の3つの方法をおもに用いた。

(1) 後期ローマ帝国の政治史に関する研究史の精査。

私はローマ帝国の研究に20年以上にわたって従事してきたが、帝国の最盛期である紀元1～3世紀が長らく専門としてきた時代であり、本格的な後期ローマ帝国時代の研究は今回が初めてである。本研究の計画の立案のために、後期ローマ帝国史研究についてかなりの調査をおこなったけれども、実際に研究を開始するにあたっては、いまいちど、より広範囲に従来の諸研究を本格的に精査することから始めた。とりわけA・H・M・ジョーンズの大著が発表された1960年代以降の研究について、正確にその内容を把握するとともに、それらが充分扱ってこなかった領域、時期、そして考証の次元を明らかにすることを試みた。

(2) ブリテン島と現在のドイツ・スイスに相当する地域を中心としたローマ帝国辺境属州の遺跡や遺物に関する実地調査。

研究テーマの性格上、対象となる地域における実地調査が大きな効果を生むことは間違いない。イギリス、ドイツ、スイス、フランス、そしてドナウ川上・中流域を対象とし、実地調査をおこなうこととした。後期ローマ帝国時代の重要都市の実態を、遺跡と遺物を通じて把握することを目指したわけである。また、ゲルマン人とローマ人との間をわけた帝国国境線の城塞などの遺跡も調査して、その国境の内と外との関係を、19世紀以降のイデオロギーが混入した「民族」概念にとらわれることなく、考古資料に即して理解することに努めた。調査にあたっては、イギリスではケンブリッジ大学古典学部、ドイツではケル

ン大学などに拠点を置き、同学の研究者から助言を得て実態調査を実施した。

(3) 後期ローマ帝国時代の研究をおこなっている日本人研究者の研究集会。

日本の西洋史学界においては、すでに上記1で説明したピーター・ブラウン教授の影響で、近年古代末期史研究者が急速に増えている。私のおこなおうとする帝国の西部についての研究が、その独自性を主張しつつも、帝国東部を主たる舞台にしたブラウン教授らの研究と疎遠であることは望ましいことではなく、相互に情報を交換し刺激しあって研究すべきだと考える。そこで、わが国の古代末期史研究者の小規模な集会を持ち、後期ローマ帝国についてどのような研究課題を現在求めているのかといったレベルから始めて、ローマ帝国の衰亡に関わる歴史認識の問題にいたるまで討議することとした。

4. 研究成果

後期ローマ帝国の政治史に関する研究史の把握は、帝国史研究全体が1980年代以降急速に研究の細分化が進行したために、困難を極めた。とくに、後期ローマ帝国西方属州の都市については、ケーススタディが増えたが、議論と結論が地域ごとに異なり、集約することが容易でなかった。帝国全体でも、危機的状況を呈しているライン・ドナウ沿岸の諸地域と異なり、北アフリカの属州都市は比較的安定しているなどの違いもある。帝国西部の政治状況といっても、諸都市を核にして考えねばならないので、都市についての研究状況の把握は、今後も継続しなければならない課題となっている。

研究史と学界動向の把握のためには、現在の古代終焉期理解の主流学説となっている「古代末期」学派の見解、ならびにその問題点の検討がなされなければならないが、これについては、独自の検討ばかりでなく、計画段階で予定していた日本の研究者の間での討議を主宰することができて、大いに進んだ。日本西洋史学会第58回大会(2008年5月11日 於 島根大学)で、ローマ帝国の『衰亡』をめぐるシンポジウムをおこない、その成果を学会誌『西洋史学』第234号誌上で発表できたのは大きな成果であると自負している。ここでは、「古代末期」学派の研究の問題点をはっきり指摘し、同時に近年の同学派に対するイギリス学界での批判の提示をいかに受けとめるべきかという点も議論できている。わが国の研究者の有るべき研究の方向性についてさまざまな可能性を紹介できたことは、学界に対する貢献であると自ら評価している。この研究史の検討と並行して、日本人研究者の西洋古代史に対する研

究のあり方をも考察し、外国語と日本語で出された共著の分担執筆として発表したことも成果であったと考えている。

(以上が「3. 研究の方法」に記述した(1)と(3)に対応する成果である。)

いまひとつの重要な課題(「3. 研究の方法」に記述した(2)に対応)は、政治史の観点からの西方属州の実態分析である。海外の遺跡と博物館等の調査により、物質資料の点から、研究対象地域について具体的な知見を得ることができたが、最も理解が進んだ論点は、いわゆる「ローマ化」と後期ローマ帝国時代の状況との関係についてである。考古学的な研究の成果をまとめた文献や実地での調査によって、帝政盛期にローマ風の都市的生活が浸透していた地域と、そうではなかった地域との間には、後期ローマ帝国時代の状況にはっきりとした違いがあることが認識された。

ブリテン島のように、「ローマ化」が表層に留まったとされる地域は、政治的に帝国の支配を離脱する可能性を早くから醸成していたことが、都市の構造から判明した。同じことは、比較のために検討したドナウ川中流域のアクィンクム(現ブダペスト)の歴史を通じても把握できた。一方、帝政盛期に比較的「ローマ化」が進んだと思われる現在のフランスに相当する地域では、後期ローマ帝国時代の政治的な変動に対して多様な対応が観察されたが、ローマ風の生活様式が深く根を下ろしていたところでは、5世紀以降の諸部族の移動にともなう都市的な共同体の変容は劇的であったことが、遺跡や遺物から観察された。

ただし、そうした激変する都市の姿を、5世紀以降の文献史料に残されている「ローマ」側の「反ゲルマン」的な感情と抱き合わせて歴史像として提示することは不適切である。このことも、帝国領とその「外」の世界との関係を考察する中で了解できた。従って、さらに深められるべき研究は、「ローマ」側ではなく、「ゲルマン」の方であり、「ゲルマン人」をどう扱うか、解釈史や研究史を概観し、分析法の見通しを得るところまで研究した。しかし、今後の課題はまだ多いと感じている。「ローマ」「ゲルマン」の二項対立を止揚した上で、いかに5世紀の時代像をまとめ上げるかということが、研究代表者の次の大きな課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 南川高志、編著、ローマ帝国の「衰亡」

- とは何か、西洋史学、査読あり、234、2009、61-73
- ② 南川高志、大清水裕著「3世紀後半のイタリア統治の変容と都市社会」(書評論文)、法制史研究、査読あり、58、2009、415-417
- ③ 南川高志、ハンガリーのローマ帝国、西洋古代史研究、査読なし、8、2008、23-41
- ④ 南川高志、リッチバラとポートチェスター、西洋古代史研究、査読なし、6、2006、41-54

[学会発表] (計2件)

- ① 南川高志、ローマ帝国の「衰亡」とは何か、日本西洋史学会第58回大会、2008年5月11日、島根大学
- ② 南川高志、遺跡と表象から考える古代ローマ帝国像、関学西洋史研究会第10回年次大会、2007年11月18日、関西学院大学

[図書] (計4件)

- ① 南川高志、監訳、ピーター・サウエイ(編)、ローマ時代のブリテン島(ブリテン諸島の歴史第1巻)、慶應義塾大学出版会、2010(9月出版予定)、本文のみで全320ページ予定
- ② Minamikawa Takashi, The Power of Identity: A Japanese Historical Perspective on the Study of Ancient History 共著、Applied Classics (Angelos Chaniotis et al eds.) Franz Steiner社(ドイツ)、2009、南川高志執筆部分231-243
- ③ 南川高志、共著、京都と北京(紀平英作・吉本道雅編)、京都大学学術出版会、2006、総ページ数271、南川高志執筆部分228-249
- ④ 南川高志、共編著(服部良久・山邊規子と共編)、大学で学ぶ西洋史[古代・中世]、ミネルヴァ書房、2006、総ページ数359

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 ()

研究者番号：

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：